

## 地域で取り組むアカミミガメ防除 ～捕獲から死体の有効利用まで～

西堀智子 (和亀保護の会)

### ●はじめに

近年日本各地で侵略的外来種が定着繁殖し、在来の自然環境を破壊しつつある。その対策として防除が行なわれているが、多くの種で完全駆除は困難になっている。外来種を低密度管理し、自然回復を図るならば、防除を永続的に行うことが必要である。ここでは東播磨地域のため池協議会単位で自立的に行われているミシシippアカミミガメの防除活動の事例を挙げながら、いかに効率的に、またエコに防除を持続しているかを紹介する。

### ●予算と手間のかからない捕獲

カメの捕獲は通常かご罟で行なうが、エサ代が必要になり、また見回りや一日ごとの引き上げの手間がかかる。ミシシippアカミミガメが開けた場所での日光浴を好む性質を利用して楽に捕獲できる日光浴罟を自作することをため池協議会に提案した。エサが要らず、長期間の放置が可能な手間いらずの罟である。さらに日光浴罟ではミシシippアカミミガメ以外のカメが入ることは少なく、混獲を避けられる。

加古川市野口町の「峠池を考える会」ではいくつもの日光浴罟が考案され、推敲が重ねられた。平岡町の「寺田池協議会」でも日光浴罟での捕獲の試みが行われた。そしてそれらを参考に東播磨県民局が日光浴罟の作成マニュアルを作った。



左：かご罟での捕獲。水没を避けるためにペットボトルを入れるなどの手間もある。

中：日光浴罟の作成（加古川市「峠池を考える会」）。

右：地元で余った竹を使用するなど「エコで、丈夫で、使いやすい」形を目指して、様々な工夫が凝らされた。メンテナンスが不要な単純な形であることも重要なポイントである。

### ●処分する側・される側、両者にとって負担の少ない殺処分

冷凍による殺処分は、低温で越冬するカメ類にとって、比較的安楽な殺処分の方法とされている。コンセンサスの得やすい方法でもある。人間にとっても専用の冷凍庫さえ設置すれば、作業は簡単で心的負担も少ない。

### ●死体の有効利用

ミシシippアカミミガメの防除で最も問題となるのは死体をどうするかである。これまでは焼却されることが多かったが、大きなエネルギーを使うことになり、予算も必要である。食用や肥料にして有効利用することが望ましいが、商業ベースにのせようとすれば採算が合わない。しかし地域で住民が作業し、作業者がその恩恵を受けることでそれが可能になる。

「食べる」・・・ミシシippアカミミガメの肉はヘルシーで味も鶏肉に似ている。ただし甲羅をはずし皮を取り除く作業は大変で、しかも可食部が少ないため、日常的に食したり商品として販売したりすることは困難である。しかし、外来種問題や生命倫理の問題を考える材料として、地域の啓発イベントなどで活用するには大変有効である。

「堆肥化する」・・・防除対象の水辺のわずかなスペースを活用して堆肥の山を作ることができる。材料はカメの死体の他、抜き取った草や落ち葉、野菜くずなど。堆肥は条件が良ければ3週間~1か月で完成する。「堆肥は臭い」というイメージが持たれがちだが、発酵が上手く進めばほとんど臭いは出ない。また発酵が上手くいかず腐敗しても、掘り返さなければあまり問題はない。成果物は地域で消費する。



左：和亀保護の会がフィールドとしている寺田池の水利組合の倉庫に冷凍庫を設置。その後東播磨県民局が助成し、他にも冷凍庫を設置する協議会が現れた。  
 中：明石高専・東播磨県民局・和亀保護の会が行ったアカミミガメの堆肥化実験。切り返しをしなくていいように、コルゲート管を差し込み、好氣的な環境を維持している。  
 右：堆肥は3週間ではほぼ完成。硬い骨や甲羅は残るが、圧力を加えれば崩れる。牛糞並みの窒素・リンを含み、鶏糞並みの即効性があることが分かった。



左：加古川市志方町の「西牧ため池協議会」では、臭いを心配する住民に配慮して大きな袋を使用したり、コルゲート管を余った竹で代用したりする工夫が見られた。  
 中：地域の清掃活動で集められた落ち葉を堆肥に利用（「峠池を考える会」）。  
 右：出来上がった堆肥は地域に飾るビオラ栽培に利用された（「峠池を考える会」）。



左：各地のため池のかいぼりや各季節のイベントで、外来種問題の啓発と共にアカミミガメを食べる試みが行われている。さばき方講座も行われている（稲美町「天満大池ため池協議会」）。  
 中：アカミミガメの肉は地鶏のような味わいで、油ともよく合うが、一塊が小さいので料理は限られる。唐揚げが最も適しているだろう（稲美町「水辺の里公園」）。  
 右：兵庫県の農水のイベントでは鶏のセセリとアカミミガメの食べ比べが行われた。東播磨地域では、水辺の地元と行政が共にアカミミガメ対策に取り組んでいる。

●地域でのトータルな取り組み

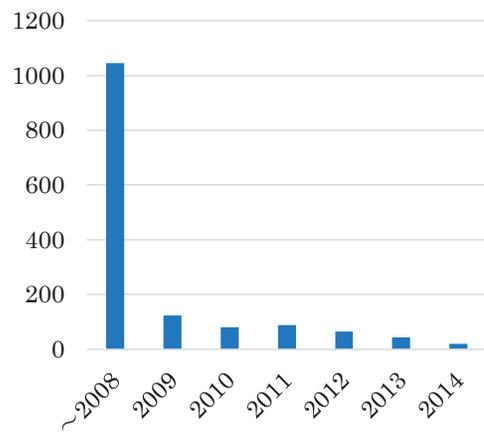
アカミミガメをはじめとする外来種対策は、負担になれば継続しない。「地域のために、地域のみならず」という「地域づくり」の視点を持ち、捕獲から処分、有効利用までを外来種問題の啓発を含めて、楽しく、地域で自立してトータルに行なうことが大切である。



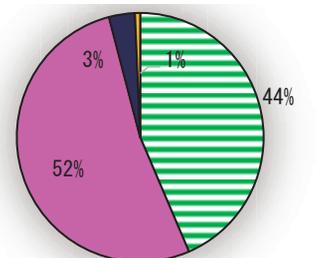
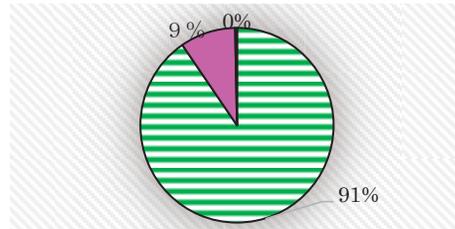
- 左：啓発イベントも地域主体で。専門家や行政は地域独自のやり方を尊重し、飽くまで自立的な活動を助け、支援する役割を担いたい（「峠池を考える会」）。
- 中：低密度管理が実現しているようなところでは、ゲーム的な要素を入れて楽しく作業や啓発活動を行うことが有効である（「寺田池協議会」）。
- 右：生きものの防除は多かれ少なかれ精神的な負担を伴う。それを昇華させるために時には慰霊を行うことも大事である（「寺田池協議会」「峠池を考える会」）。

●防除の結果（加古川市平岡町「寺田池協議会」の場合）

2006年当時、14haもの広い寺田池には夥しい数のアカミミガメが生息していた。果たして成果が出るのか全く勝算のないまま防除を始めたが、10年間の地道な防除活動に加えて2回の池干しの結果、現在では低密度管理が実現し、ガガブタなど希少な水草が回復し、カメ類では在来種のスッポンが増え、しばしば目視観察されるようになった。



寺田池の年毎のアカミミガメの捕獲数



アカミミガメ
  クサガメ  
 スッポン
  ニホンイシガメ

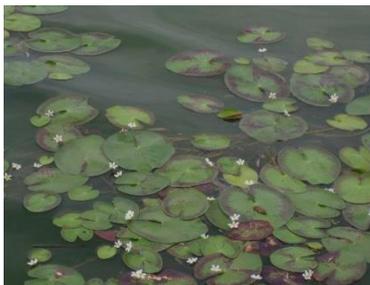
寺田池のカメ類の種構成

上 2006.11~2008.12

下 2012.11~2014.12



スッポンの産卵が観察されたり、調査でもスッポンが捕獲されるようになってきた。



2015年の池干し以後、水質が良くなり、ガガブタ・ヒシ・ハスなども回復してきた。

【地域で取り組むアカミミガメ防除4箇条】

- 1、お金が要らないこと (予算があるのははじめだけ)
- 2、つらくないこと (志が高くてもハードな作業は続かない)
- 3、得になること (ご褒美があればより効果的)
- 4、楽しいこと (長く続けているとマンネリ化してしまう)